

太宰治「満願」試論

— 読解の試み —

三 谷 憲 正

- 一、はじめに——〈読解〉の必要性
- 二、冒頭と末尾
- 三、「時間」
- 四、「飲み物」
- 五、「原始二元論」
- 六、「あれ」と「さしがね」
- 七、先行研究批判
- 八、「愛といふ単一神」
- 九、「呼称」
- 十、「笑ひ」
- 十一、おわりに——〈古典的〉な構成

先行研究を概観すると、奇妙なことにこの作品の〈読み〉が勘違いされているように思われてならない。多分それは、末尾の「あれは、お医者さんの奥さんのさしがねかもしれない。」という一節の「あれ」が指示する内容を取り違えていると同時に、「さしがね」の意味する所を正確に把握していないために起こっている現象のように考えられる。

本稿では、優れた佳品であるはずの「満願」の内的な構造を、「時間」「飲み物」「呼称」などの視点から明らかにすることを通じて、従来妙にねじ曲げられて読解されて来た文脈から、言説そのもの目指している道筋に復することを意図している。

一、はじめに——〈読解〉の必要性

この原稿用紙数枚の優れた小品は、砂子屋書房の雑誌、『文筆』（昭和十三年九月号）に発表された。その際の経緯に関わった宮内寒弥氏は「天分について——太宰治氏夫人に——」（昭和十七・一二『現代文学』）の中で、手際よく、この作品を要約している。

「太宰氏は、『満願』といふ五六枚の小説を書いてくれた。旅先で見た、或る小学校の奥さんが、主人が肺を患ひ、医者のところへ薬（薬）とりに来る度びに、医者から『奥さま、もうすこしのご辛棒ですよ』と大声で叱咤される。体のため夫の愛を受けてはいけないという意味である。奥さんは清淡な感じの人でそれを固く守る。それだけにふびんな氣もする。苦節三年であつた。或る夏の朝、医者婦りの奥さんが、医者の家の縁側で新聞を読んでゐる眼のまへの小道を、簡單服を来た清潔な姿で、飛ぶやうに歩いて帰る。白いパラソルをくるくるまわして歩いてゐる。それを見て、医者の奥さんが、『ああうれしさうね』『けさ、おゆるしが出たのよ』と云ふのに作者が感動する小説である。」

「作者」とは今風に言えば、語り手の「私」にならうが、しかし、この光景を「感動」して見ている人物の実感確

実に我々にも伝わって来る。

ストーリーのみならず、その方法においても、この作品が優れたものであることは一読しただけでも理解できよう。例えば、奥野健男氏は『太宰治』（一九七三・三 文藝春秋）の中で、

「『満願』という昭和十三年九月号の『文筆』に発表された掌篇小説は、それまでの太宰の作風とガラリと変り、人間の善意への信頼を底抜けに明るくうたっている。ぼくはこの明るさと善意のかけにある作者のかなしさを感じるのだが、パラソルをくるくるまわしながら、さつさと飛ぶやうにして歩いて行く若い夫人の姿はまことに鮮やかで、技法的にも完全な傑作短篇と言つてよい。」

と言つてゐる。

また、相馬正一氏も『評伝 太宰治』第三部（昭六〇・七 筑摩書房）の中で、

「従来この掌編は、一般読者よりも作家や評論家の間で評判がよかった。わずか原稿用紙四枚くらの分量でこれだけ手応えのある逸品を創りあげるあたり、まるで小説作法の見本を見せつけられたような氣がするからである。文中、〈性〉に関する具体的な叙述はひとつもなく、それでいながら女人（にょにん）の〈深部〉に

漂う哀感を白いバラソルに託してさりと象徴的に掬いあげてみせる手腕は見事である。」(一 中期の方
法)

と指摘している。

しかし、このように傑作の扱いを受けているにもかかわらず、「技法」や「小説作法」はおろか、実はこの作品そのものの言説の「読解」においてさえ、管見ながらこれまでも十分な光が当てられてこなかったように見える。例えば、お医者の説く「原始二元論」にまつわる「悪玉善玉」と、「私」の「愛といふ単一神」との関係はどうなっているのか。あるいは末尾の「あれ」とは何を指しているのか。さらにはその後続く「さしがね」とは一体どのようなことを言うのか、等々である。これらの疑義は作品そのものの構造と深く関わっているように思われる。したがって、先ずはその解明を試みることにしたい。

二 冒頭と末尾

そもそもこの作品の冒頭は、「これは、いまから四年まへの話である。」と現時点から過去へと遡らせる形で始まっている。このことは、注意深く読むと、末尾近くに「年つき経つほど、私には、あの女性の姿が美しく思はれる。」という一文に対応し、同じく現在に戻っているのがわかる。

特に冒頭の「これは」という指示語が以下の語りを引き出す役目を担っているのに呼応して、末尾に「あれは、お医者さんの奥さんのさしがねかも知れない。」と、わざわざ改行して置かれている一文中の「あれは」が語りを締め括っている対応にも注目すべきであろう。

この点に関して、吉本隆明氏の『言語にとつて美とは何か』(『吉本隆明全著作集』6 昭四七・二 勁草書房)は次のよう指摘している。それは「太宰が表現上もつとも影響をうけたのはおそらく落語、講談本の話体である。」として「満願」を含む昭和一三年から一五年あたりの代表的な中期の作品を評して、

「それぞれの書き出しと終末の配慮は、古典的な「落ち」の方法に対応している。」^(注3)

と言う。確かにすぐれた洞察だと思われる。

しかし、それだけではなく、このように、いわば額縁のごとく冒頭と末尾に現在を持つて来て、中に過去を入れるという叙述の仕方には、一つの世界の「完結性」を生み出す効果もあるはずである。いわゆる「前期」^(注4)、創作集『晩年』収録の諸作品が一種の「混沌」を目指し、「玩具」に至っては「未完」という一語さえ末尾に置かれている表出の方法と比較してみると、この在り方は顕著である。しかし、いわゆる「中期」になると、このように「断片」を

投げ出すような叙述の在り方から、安定し、完結した物語世界を構築する方向を取るようになっている。そのことは題材を主としたストーリーの上からだけではなく、この「満願」で見られるように、一種の〈古典的〉な均整美を備えた、その描き方自体にも窺われる。

三 「時間」

では、「時間」はどのような把握がなされて来るのだろうか。先ず、季節から考えてみたい。ここでは、「夏」の出来事と設定されている。これは後段でも「八月のをはり」と重ねて出て来ることから判るように、「伊豆の三島」の「夏」を背景にしての物語である。が、しかし、この作品中一体どこに、汗のしたしたる「暑さ」があるのだろうか。寝苦しい熱帯夜や、焼けつくような夏のざらざらする太陽を想像させる語は、一つも見あたらない。確かに終段には、若い人妻が「パラソル」を回す描写があるにはある。しかし、本来「パラソル」とは鋭く暑い日差しを遮るもののはずだが、ここにおいても、そうした夏の「暑さ」を表す語はない。実は「ない」のではなく、注意深く取り除かれているのではないだろうか。この点については、本稿「七」でもう一度触れるが、ともあれここでは、夏という季節が設定されているながらも、「暑さ」を明示する言

葉がない、という特徴の確認をしておきたい。

では、「時間」の方はどのように切り取られているのだろうか。最初、医者に駆けつけるのが「ある夜」。そして「その夜」から親しくなる、とあるように、読者は「夜」からこの物語に入ることになる。相馬正一氏は「太宰治と沼津・三島」（一九八九・六 洋々社『太宰治』5）の中で、

「太宰が坂部武郎所有の自転車を乗り廻していたことは、先に挙げた小館京宛の書簡（手紙）からも判るが、怪我をしたことについては武郎・愛子の兄妹にも記憶がないというから、仮にあつたとしてもそれほど大した傷ではなかったものと思われる。」（『満願』のモデル」の項）

と述べている。現実には怪我などはなかったかもしれない。あるいは仮りにそうだったとしても、わざわざ「酒」を飲んだ遅い「夜」に治療を受けるほどのことではなかったかもしれない。ここで問われるべきは、この作品において、なぜ、このような設定を選んだのか、ということであろう。やはりそれは、「夜」からこの物語が始まる必要があつたからではなかったか。

ともあれ、次段で「私」はこの医者を訪うが、今度は「宵の私の訪問」、「今宵はビールでなくブリツデ」という

ように、冒頭の「夜」という時刻よりは前の時間になって来ている。その後、「私」は「毎朝、散歩の途中に立ち寄つて」新聞を読ませてもらっている。その縁側に座っていると、「毎朝」牛乳を配達する青年が「私」に挨拶してくれる。そんな時刻に「私」は夫の薬を取りに来る「若い女のひと」を見かける。そして「八月のをはり」の「朝」、その女性「さけ、おゆるしが出」て、うれしそうに帰つて行くのである。以上を整理し見ると、「夜」——「宵」——「朝」、と変わつて来ていることに気づかせられる。つまり、この作品は、「夜」から始まり「朝」で終わっている物語ということが言えよう。

四 「飲み物」

しかし、推移していくのは「時間」だけではない。それは、やや奇異な感があるが、次々と登場してくる「飲み物」である。例えば、初めて出会う「夜」の場面では「酒をのんで」いた。次の「宵」には、医者「ビール」を奥さんに言いつけ、奥さんは「ビールでなくブリツヂ」にすることを提案している。そして次の、「朝」の場面になると「私」は奥さんの出してくれた「冷たい麦茶」を飲むことになる。このように、時刻に対応させ、「酒」——「ビール」——「麦茶」と整然と付置されていることが判る。

なぜこのように置かれてくるのか、と云えば、それは恐らくこの作品の持つ意図が明るく、さわやかな方向へとそのベクトルを向けているからであろう。「満願」は、作者太宰治の所謂「安定と開花の時代」（奥野健男「太宰治論」といわれる「中期」の出発点に位置しているものであり、村橋春洋氏の言う「太宰の『一輪の花』に寄せる思い」と「腹から笑い合えるような人との信頼、医者と患者との人間関係、貞節な若い人妻」の世界であるからでもあろう。

しかし、このことはやはり単にストーリーの面からだけでは、説明できない。やはり、構成も含めた、技法的な「喩」の側面からも「読み解く」べきではなからうか。

五 「原始二元論」

このように考えてくると、では、「お医者」の主張する「善玉悪玉の合戦」としての「原始二元論」と、「私」の信じたか思っている「愛といふ単一神」とは、どのようなクロスしているのだろうか。

作中、前者は「ビールを命ずるお医者自身は善玉」とし、「ブリツヂ」にしようと言う「奥さんこそは悪玉」となっている。これを見れば、「原始二元論」も宗教的な意味を持つて善と悪とを峻別するものではないことが判る。むしろ

ろ、見方を変えれば、飲み過ぎると体に良くないアルコールを止める「奥さん」が「善玉」であり、今宵もアルコールを飲もうとする「お医者」の方が「悪玉」かもしれないのだ。つまりはユーモラスに語られているのであり、このでの「善玉」と「悪玉」とは相互に入れ替わる可能性も十分ありえよう。

このことは「若い女のひと」を巡って考えてみると、どのような構図が描かれるのだろうか。「お医者」はこの人妻に「固く禁じ」ている。何を「禁じ」ているかは、この女性の夫が肺病であり、また「お医者」が「言外に意味をふくめて」言っていることから、二人の「夫婦生活」であることは確かである。ここに登場する「お医者」は「大声で叱咤」し「固く禁じ」「心を鬼にして」まで更に続けて「叱咤」している。先の「二元論」からすればこの医者は「悪役」に回っているものであり、「若い女のひと」とっては「悪玉」になってみせていると言えよう。

六 「あれ」と「さしがね」

ここまで読んで来ると、作品末尾の

「あれは、お医者のおさんのさしがねかも知れない。」
という一文を問題にしなければならない。

後述する「さしがね」の語義を無視すれば、その指示さ

れる内容には次のような三通りの可能性が考えられる。一つは、「お医者」の「奥さん」が「私」に語った話を指している、という読み方である。二つ目には、「固く禁じ」るように手を回した、ということ。あるいは、この若い人妻に「おゆるし」が出るように「お医者」の夫に働き掛けた、ということ。これらの組み合わせは別として、多分考えられる可能性はこの三つしかない。

確かに、「あれ」とは一見すると「奥さん」が「私」に話した内容、すなわち肺病の夫を三年間看病し、夫との間を禁じられ、今朝その許可が出た、という話を指し示しているかのように見えてしまうかもしれない。言い換えれば、この「奥さん」が何らかの作意を持って「私」に大人のメルヘンを語った、といったような解釈もあるかのように考えられなくもない。が、しかし、もしそうだとすると、「奥さん」が直接影響を「私」に与えたことになり、更には「三年、と一口にいつても——胸がいつぱいになった。」という末尾近くの一文のリアリティーが宙に浮き、実にそらぞらしいことにならないだろうか。つまり、「奥さん」の話がどういう目的を持っていたにしろ、作り事という設定であるなら、「私」は何もこれほど、思い入れる必要はない。また、「年つき経つほど」という四年間に「ますます美しく」なる、その根柢も揺らぐことになろう。そして

さらには、それを真に受ける読者に対しても、嫌なやり方で背負い投げを食わせる結果にもつながりかねない。

また、二つ目の「禁じ」たという可能性にしても、それほど遠くのほうまで、指示語の内容が飛んでいるのも奇妙である。のみならず、なぜそれほど、この「奥さん」を「悪意」に満ちた人物として設定する必要があるのか、と首を傾げざるをえない。

ここでは、最後の可能性、即ち「おゆるし」を出すように取り計らった、〈善意〉の影響を指すと考えてみたらどうだろうか。

そもそも、「さしがね」とは語義的には、人形を使う文楽などであれば、操り人形の腕に仕掛けて動かす棒のことであり、また歌舞伎などであれば、見物人に見えぬように、陰から蝶・鳥などを操る黒塗りの細い竹ざお、のことであった。そこから、陰に回って、後ろから人をあやつること〴〵を意味することになる。煩を厭わず、改めて言説の指し示す通りに追求を試みると、では、一体、この「奥さん」は誰の陰に回り、何を教唆したのであろうか。登場する全ての人物、即ち「私」「お医者」「奥さんの弟」「牛乳配達青年」「若い女のひと」その「夫」、それに「奥さん」自身、それぞれに当たって考えてみれば、裏へ回り、この「奥さん」が間接的にその影響力を行使しうる人物は、

彼女の夫である「お医者」しかないことが納得されよう。ここから、夫の「お医者」を経由しない形での「奥さん」の話を指す、という可能性は除外されるのではないか。

結論的に言えば、即ち、この「奥さん」が夫の陰に回り、もうそろそろ「おゆるし」を出すように取り計らったと、読んでいいだろう。そう「読解」することにより、〈善意〉の世界が描出されるように思われる。

このような点から、先程の「善玉悪玉」をとらえてみると、「固く禁」ずる「お医者」がこの時点では「悪玉」であり、「禁」ずる対義語の「おゆるし」を出すように裏で「お医者」にしむけたのが「善玉」の「奥さん」だとすると、「原始二元論」はユーモラスに入れ替わっているのが判ってくる。

七 先行研究批判

このような「読解」から、先行研究を検討してみると、例えば、次のような見解に対してどうしても疑問を抱かざるをえなくなってくる。

斎藤かほる氏の「満願」^(注7)は、

「原始二元論を唱える医師が、一人の若妻の願いを満たしてやるといふ人間関係。この哲学からいえば、どちらが悪玉・善玉になるのであろうか。禁欲の命を出

した医師が善玉、その解放を待ちわびる妻が悪玉。

しかし、自由の日、スカートの裾翻してパラソルを振る若妻の姿は、もつとも清らか善玉であり、その日、医師は完敗した悪玉の位置に転落したのではないだろうか。さて、この医師の悪玉が悪玉として解釈できるのは、そのかげに「奥さんのさしがね」という、もつと強い悪玉がいるからだ、という構成は、人間の善悪の葛藤の織りなす一つの美しい綾と見える。」（傍線引用者以下同じ）

細かい批判的検討は措くとしても、この決定的な誤解の原点は「さしがね」の意味の取り違えにあり、ここに「悪意」を嗅ぎ取ってしまったからではなからうか。ここで言う、「善玉悪玉」とは交替可能な存在として考えれば、「禁欲の命を出した医師が善玉」であると同時に「悪玉」でもあり得るという点に着目できたのではないか、と思われるのだが。

では、次の「読み」はどうであろうか。

井上諭一氏は「満願」^(注8)の項で、以下のように述べている。

「小説末尾の、へあれは、お医者^(注9)の奥さんのさしがねかも知れない。」という文章は、本当に明るい陽光のイメージの軸線上でとらえられるのであろうか。「仮に、愛を措定するとしても、その奥に秘められた悪意、

性的に欲求不満の美しい人妻に対する警戒、ジェラシイを読むことは全く可能であるはずで、とすればへさがね」は字義どおりに悪意に読まれ得る。」

ここでも、「さしがね」は「悪意」として読まれ、なおかつ、「お医者」の「奥さん」には「警戒、ジェラシー」があるという。ここにも、何か大きな誤解が潜んでいるように見える。さらに続けて、

「翻つて、そもそも『けさおゆるしが出たのよ。』というお医者^(注9)の奥さんの言葉にしても真実を語っている」と解釈されるべきであらうか。医者が、自分の患者の秘密しかも性的な秘密についてその日のうちに妻に語り、妻はそれをその日のうちに友人に語る。職業倫理と法律を無視したそういう構図は、当時の実態として十分に考えられるが、しかし、妻（奥さん）が嘘言を弄している可能性も同程度に考えられよう。」

と読んでいる。が、「妻（奥さん）」が虚言を弄している可能性」は、前節で検討したように、「あれ」の指示する内容の取り違えから生じてくる「読み」であり、その「可能性」はないと思われる。

このような理解は、以上の論考の他に、

菅原洋一氏の「太宰治『満願』について」^(注9)や、あるいはまた、

「『さしがね』という言い方自体はこの『悪玉』に『奥さん』が擬せられたことから来ているであろう。」「しかし、この『さしがね』の意味はそれだけではない。『パラソル』の女の姿の美しさが、『奥さん』によって差し出されたものであるかもしれないという感じが、そこには隠されている。」

という森下辰衛氏の「満願」を読んで――祈りの詩学のために」^(注10)などがある。

これらに共通しているのは、いずれも「さしがね」に「悪意」を読みとろうとする姿勢である。その上で「あれ」の指示対象を考えようとするとそこから生じてくる解釈だと思われる。もしかしたら、そのような理解の根柢は、作家太宰治の、流布されている一種の「伝説」があるのかもしれない。今本稿がここで行おうとしているのは、「伝説」は一旦外へ置き、本文そのものつまり言説それ自体を基にし、そこから何が読めるのか、という「読解の試み」である。

なお、本稿の理解の仕方とは、若干方向は異なるが、夫の「お医者」を介して、その「励まし」を指している、という田中良彦氏の「太宰治『満願』論」(『新編 太宰治研究叢書』二所収 一九九三・四 近代文藝社)がある。

「作品の結びにおいて、今まで背後にいたお医者との奥

さんが表面に上ってくる。その理由は、『あれ』が『奥さんのさしがね』との思いを『私』が抱いたからである。その思いが、奥さんに思いを馳せさせるのである。では、『あれ』とは何のことなのだろうか。小学校の先生の奥さんに対するお医者^(父)の励ましのことではないだろうか。お医者^(父)の奥さんは、『私のうつとしい胸のうち』を察し、どうにかしてあげたいと思っただけであろう。そこで、小学校の先生の奥さんへの励ましに託して、『私』に対する励ましの言葉を彼女は、お医者^(父)に言わたのである。お医者^(父)の励ましは、先生の奥さんだけではなく、自分に対しても向けられていたことを、現在の『私』は気付いたのである。」(2)

この時点において、「お医者」の「奥さん」に、「小学校の先生の奥さんへの励ましに託して、『私』に対する励ましの言葉を彼女はお医者^(父)に言わた」という意識があったかどうかは定かではない。が、結果論として見れば確かにそのような効果があつたことにはなるだろう。ともあれ、「お医者」を経由しているという点においては、「さしがね」の意味するところに合致し、またここに「善意」を説き及ぼしている点に本稿の趣旨と重なり合うものがある。とは言え、「お医者^(父)の励まし」をより限定して考えるべきであり、かつ「さしがね」を「取りはからい」としてみれば、

やはり「お許し」という指示内容に至るように思われる。

八 「愛といふ単一神」

では、「私」の言う「愛といふ単一神」の方はどうなるのであろうか。この点に関しては、佐古純一郎氏が『満願』『待つ』（一九九二・六『太宰論究』朝文社）の中で次のように指摘している。

「『愛といふ単一神』は、この場合、聖書に啓示される人格神としての神のほかには受けとりようはないであろう。」（二）

「太宰が聖書に啓示される『神』をどのようなイメージで了解していたかは、必ずしも分明でないのだが、それが、『愛といふ単一神』として太宰の心に意識されていたことはほぼ間違いないことだと思われる。」

（三）

「愛といふ神」＝「イエス・キリスト」と見ているが、しかし、ここにおける「神」に、何も教義的なそれをあてはめる必要はないように見える。むしろ、三年間「禁じ」られ、「八月のをはり」の朝、「おゆるし」をもらい、「さつさと飛ぶやうにして」夫のもとに帰っていく若い人妻の清潔な姿こそが、ここで言う「愛といふ単一神」の形象（注11）された姿だと受け取るべきであらう。

しかし、この題材はともすれば、通俗に流れてしまう危険性も同時に孕んでいる。そのため、何を「固く禁じ」たのかも明言せず、「言外」にどんな「意味を含め」たのかも語ってはいない。当然「おゆるし」の内容をも具体的に明示してはいない。これは省くだけ省いた最小限の言い方を選んで、先の危険性を回避しているためである。ここから、「あれ」という指示語の曖昧さも出てくるだろうし、「さしがね」の意味するところの誤解も生じてしまったと言えよう。

だが、省略の手法だけでは、この「美しい」女性のイメージは造型されない。ここではこの女性に夏にふさわしワンプイス仕立ての「単服」を装わせ、素足に「下駄」をはかせている。しかもこの飾らない女性性は「清潔な感じのひと」と描写されている。この点は「おゆるし」の出た朝に「白いバラソル」を伴ってもう一度念を押すように「清潔な姿」と出て来ている。

そもその始まりから、「私」は「お医者の世界観」を聞き、「一味爽涼」を感じている。そして散歩の途中で立ち寄る「お医者」の家の「座敷の縁側」で夏の朝の「冷たい麦茶」を御馳走になっている。そこで新聞を見る私に吹いてくる夏の朝風の何と爽やかなことか。眼をわずかに向けると、そこには「青草原」がみずみずしく繁り、「水量

たつぷりの小川」がいかに涼しげに流れている。そこに「旅の私」とは縁もゆかりもない「牛乳配達の青年」が清々しく「おはようございます」と「毎朝、きまつて」きちんと挨拶してくれる、その気持ち良さ。別に牛乳を取っているお客でもない「私」になぜ青年は挨拶をするのだろうか。というよりはなぜ、そのような人物をここで描出する必要があつたのだろうか。さらに、翻つて考えてみると、「奥さんの弟」の「おとなしい少年」を点綴したことも、「少年」——「青年」——「若い女のひと」という道行きで読める設定のように思われる。

つまり、これら全てのことは、「清潔な感じ」の若い女性の背景として、いわばその〈清潔感〉を支える役割を負つてここに置かれていると考えていいのではなからうか。換言すれば、このような中にいるからこそ、「清潔な感じ」や「清潔な姿」、さらにはその「美し」さを持つ「愛」といふ単一神が理屈ではなく、表現としての〈感覺的な像〉を読者にもたらしていると言えよう。

ここまで解釈してくると、本稿「三」で触れた、夏の蒸しむしする「暑さ」や強い日差しが描かれていないことも納得できるようである。つまり、この作品に大切なのは清々しさであり、清涼さであるにもかかわらず、ここに汗のじむような「暑さ」など出て来たら、物語の世界を壊

し、力の弱いものにしてしまうからであらう。このような点にも注意は払われていると考えることができる。

九 「呼称」

そうした「注意」に眼を向けてみると、「お医者」の夫人は全て「奥さん」と表されてあるにもかかわらず、「薬をとりに来る若い女のひと」はまた全て「奥さま」と区別されている点が目を引く。

「お医者」の奥さんが、或るとき私に、そのわけを語つて聞かせた。小学校の先生の奥さまで、先生は、三年まへに肺をわるくし、このごろずんずんよくなつた。お医者是一所懸命で、その若い奥さまに、いまがだいじのところと、固く禁じた。奥さまは言ひつけを守つた。それでも、ときどき、なんだか、ふびんに伺ふことがある。お医者、その都度、心を鬼にして、奥さまもうすこしのご辛棒ですよ、と言外に意味をふくめて叱咤するのださうである。

確かに、一見すると、その「奥さま」は会話の中に登場しているからだ、というようにも思えなくはない。しかし、地の文に溶かし込まれている「お医者」の「奥さん」の話は、どこが登場人物「奥さん」の言葉で、どこまでが物語の語り手の言葉なのか不分明に仕組まれている。つまり、

「そのわけをかたつて聞かせた」内容がただ単に「」抜きの間接的な語りであるのなら、それまで使われていた「お医者」は、「奥さん」の視点から「主人」あるいは「夫」と呼ばれなければならないはずである。にもかかわらず、「お医者」は」とあるのはここに語り手の立場が流入しているからであろう。ちなみに、「(ふびんに) 伺う」は、様子をそつとのぞき見る「悪意」の「窺う」ではなく、謙譲語としてとらえるべきであり、ここでは、「奥さま」の境遇を気の毒なことと拝察する、といった意味あいに理解すべき語であるはずだ。

ともあれ、ここでは、「お医者」の夫人を「奥さん」とし、「愛といふ単一神」の象徴である若い人妻を一段高い敬称である「奥さま」と区別して表していると考えることができる。比喩的に読むならば、この女性は「愛といふ単一神」が仮りに人間の姿をとって現れた、としてもあながち間違ではないだろう。

ここまで来ると、「原始二元論」と「愛といふ単一神」は矛盾するものではないことが判ってくる。むしろ、「単一神」を「二元論」が両側から支え合っている〈善意〉の構成が浮かんで来て不思議はない。この短い、散文詩といつてもいい掌篇の中には、「悪意」は不在である。

十 「笑ひ」

むろん、作中の「私」の胸中には「うつつたうしい」何ものかがあり、「愛といふ単一神」を「信じたく、内心つとめてゐた」と語られている(傍線引用者)。この表現はそうなりたいたのであり、そうなっている、ことを意味してはいない。いわばその途上にある、ということであろうか。これが末尾近くに置かれている「年つき経つほど、私には、あの女性の姿が美しく思はれる。」という一文に表されているように、「四年」の間に益々美しくなっていたことにつながっている。

しかし、この「うつつたうしい」に足をとられるべきではない。むしろ、いたる所に置かれている「笑ひ」に着目する方が、作品世界の理解に繋がるように思われる。例えば、始めに「お医者」と出会う場面からして、「私がくすくす笑つて」しまつと「お医者もくすくす笑ひ出し」て、二人とも「声を合せて大笑ひ」をしている。次の夕方の訪問では、「ビイル」よりも「ブリツヂ」と「笑ひながら」夫人は「提議」している。このようなささやかな提案に仰々しい「提議」という語を選択しているのも軽い笑いを誘うことになっているだろう。さらに「若い女のひと」と「お医者」は「診察室で笑ひ合つて」いる。このように「笑ひ」

を何箇所にも互つて登場させることにより、この作品は明るさを目指そうとしているのである。

十一 おわりに——〈古典的〉な構成

この小品には、「技法的にも完全な傑作短篇」（奥野健男『太宰治』、あるいは「まるで小説作法の見本」（相馬正一『評伝 太宰治』）という高い評価が与えられて来ている。では一体どこがそうなのか、それを主として構成の面から考察してみたい。

冒頭「お医者」に出会う「夜」、「酒」、「大笑ひ」がワンセットになり、〈起〉の部分を担当し、次の〈承〉では「宵」、「ビール」、「笑ひながら」と続いている。そして〈転〉では、時間は大きく変わり、「朝」となり、「冷たい麦茶」が出て来て、「若い女のひと」は「お医者」と「笑ひ合つて」いる。これらの場面を最後の〈結〉では「おゆるし」の出た「八月のをはり」の「朝」の「清潔な姿」へと絞つていつている。

特に〈転〉への推移は、「診察室」から「座敷の縁側」への変化にも現れている。それだけではなく、〈承〉の「宵」の場面では「ブリツヂ」を「いたしませう」という敬語（謙譲語）を用いていたにもかかわらず、〈転〉においては「横坐りにすわつてゐた奥さん」の「うれしさう

ね」という打ち解け、くつろいだ常体へと変化させている。先の菅原洋一氏の「太宰治『満願』について」は、

「大きく分けるなら、『満願』は二つに分けることができる。まず、冒頭から医者とその家のことを紹介する二段落までがその前半になる。後半部分は、医者の家と親しくなった〈私〉が『ほとんど毎朝、散歩の途中に立ち寄つて、三十分か一時間お邪魔し』ていることから展開されていく『満願』の核となり、クライマックスとなる結びの一句までである。」（2）

として、前半後半という読み方をしている。が、しかしそうではなく、この作品には四つの場面が描き込まれていてと読むべきだろう。

ともあれ、おそらく、このような〈古典的〉な構成を意図したこと自体、ひとつの意識の表れのように考えられる。その意識とは、本稿に「二」で述べた〈完結性〉とも言い換えられるものである。しかし、この〈古典的〉な手法はともすれば、〈通俗性〉とも重なり合う部分がある。その危険を承知しながら、「俗的なものの純粋度」を模索する方向を暗示したのが「狂言の神」であった。そして、「満願」より半年のちには、「俗」の象徴であるはずの「富士山」の魅力の発見を描く「富嶽百景」が発表されることになる。

従来、題材や内容、といったストーリー上の側面から、この「満願」が「中期」の幕開けに相応しいとする発言が多かったように思われる。が、しかし、そのようなことからだけではなく、以上述べ来たった「構成意識」、あるいは「描出方法」の面から、時期区分も含め、太宰文学そのものを再検討する必要があるのではなからうか。(了)

*なお、テキストは、全て山内祥史編『「初出」太宰治全集』全一二巻・別巻一(一九八九・六)一九九二・四筑摩書房)によった。

(注)

- (1) 但し引用は、山内祥史編『太宰治論集 同時代編』第2巻(一九九二・一〇 ゆまに書房)による。
- (2) 「III その作品」中の「満願」から『乞食学生』までの章
- (3) 「第四章 表現転移論 第三部 現代表出史論 3 新感覚の安定(話体)」の項
- (4) 拙稿「『狂言の神』試論——〈生活の探求〉、もしくは〈反意〉の絵模様——」(一九九六・七 和泉書院『太宰治研究』3所収) 参照。
- (5) 「昭九年八月一日付書簡」 静岡県田方郡三島町 坂部武郎方より 青森市浪打六二〇 小館京宛(絵はがき)

姉上様

こちらへ来ましてから、もう半月、経ちます。勉強も、ひとまづ片づきましたから、これから毎日自転車で沼津の海岸へでも行き水を浴びようかとも考へてゐます。ここから沼津まで約一里弱です。三島の水は冷くて、とてもはひれません。あすから、三島大社のおまつりで、提灯をさげてゐます。大蛇の見せ物もある由。

(6) 「満願」前後の問題——太宰中期作品研究(その1)

——「昭五二・九 『日本文芸学』一二二」

(7) 森安理文編『太宰治の研究』(「I 作品論」) 所収(昭四三・二 新生社)

(8) 神谷忠孝・安藤宏編『太宰治全作品研究事典』平七・一一 勉誠社

(9) 昭五六・三 『解釈』二七巻 三二二集『お医者のおさんのさがね』は、過去に秩序をあたえ、ひたむきに生きる者へのひそかな声援となつてうつるのである。とある。文意が若干不明瞭だが、やはり「奥さん」の話を指していると読んでいるようである。

(10) 平二・三 『山口国文』一三

(11) もし宗教的な意味で強いてことあげするならば、この「愛」は性愛を抜きにしたキリスト教的なアガペーの「愛」ではなく、むしろギリシャ神話的なエロスの「愛」を持つて来たほうが、理解しやすいのではなからうか。

(12) 相馬正一氏の「太宰治と沼津・三島」(一九八九・六 洋々社『太宰治』5)は「三島市緑町の今井産婦人科病院長・今井直」の項で、

「作中の『お医者の家では、五種類の新聞をとつてゐたので、私はそれを読ませてもらひにほとんど毎朝 散歩の途中に立ち寄つて、三十分か一時間お邪魔した』というようなことが実際に続けられていたとすれば、当然、滞在先の坂部武郎にも今井夫妻のことを語っているはずなのに、武郎兄妹はいずれも記憶がないという。」と報告している。

この実地調査は、三島在住の柳下孝子氏と中尾勇氏と共同でなされた。中尾氏には、『三島文学散歩』（平三・七 静岡新聞社）があり、氏はモデルとして、

「そのお医者さんは新潟出身であり、慈恵医大を卒業後、東京から三島に来て、社会保険三島病院の産婦人科に勤務した後、昭和七年に南本町三番内の旧明宝劇場（終戦前後のボツポ座）付近に今井産婦人科病院を経営し、後、昭和九年に緑町の元松坂病院の地に移転した今井直氏ではないかと、ターゲットをしぼるにいたっている。」（『満願』の主人公今井直病院長）の項）と指摘している。なお、続編として『続・三島文学散歩』（平六・六 静岡新聞社）もあり、さらに詳しい事実調査が報告されている。

なお、舞台のモデルとしては、友人の檀一雄が『小説 太宰治』（一九六四・九 審美社）の中で、船橋時代に散策の途中に立ち寄った病院を挙げている。

また、山本浩子氏は「太宰治論」（鶴見女子大『国文鶴見』第一八号）の中で、坂部武郎、斎藤（旧姓・坂部）あい兄妹など当時の関係者への聞き書きを記しつつ、太宰が三島で滞在していた

際、隣りにあった「宮内医院」をその舞台に比定している。

もつとも、山本論は全面的に鈴木邦彦氏の「太宰治と伊豆」①（②）（昭四九・六／一九七／一二『伊豆新聞』）に依拠しており、鈴木氏が「⑦ ほのほのとする作品『満願』に人間の善意を描く」（同紙六月二六日付）で「……太宰という作家は『東京八景』や『老ハイデルベルヒ』などを見てもわかる通り、話の内容はともかく、場所や日時については、ほぼ事実どおりに書く作家である。しかも、昭和九年、太宰が一夏を過ごした三島広小路の坂部宅のすぐ隣りには、当時から、宮内医院という医院が存在している。確認してはいないのだが、『満願』の医者はおそらく、この宮内医院のことではないか。」という一節を根拠にしているようである。

（13）前掲、森下辰衛氏「『満願』を読んで―祈りの詩学のために」にも、『善玉』と『悪玉』は闘争するかのように見えて、実はここでは信頼を基盤として互いに助け合つてひとつの世界を構成しているのである。」という読みがある。

（14）拙稿「『富嶽百景』論―太宰治の〈距離のとり方〉―」（一九八八・一二 佛教大学『人文学論集』第二二号）参照。

